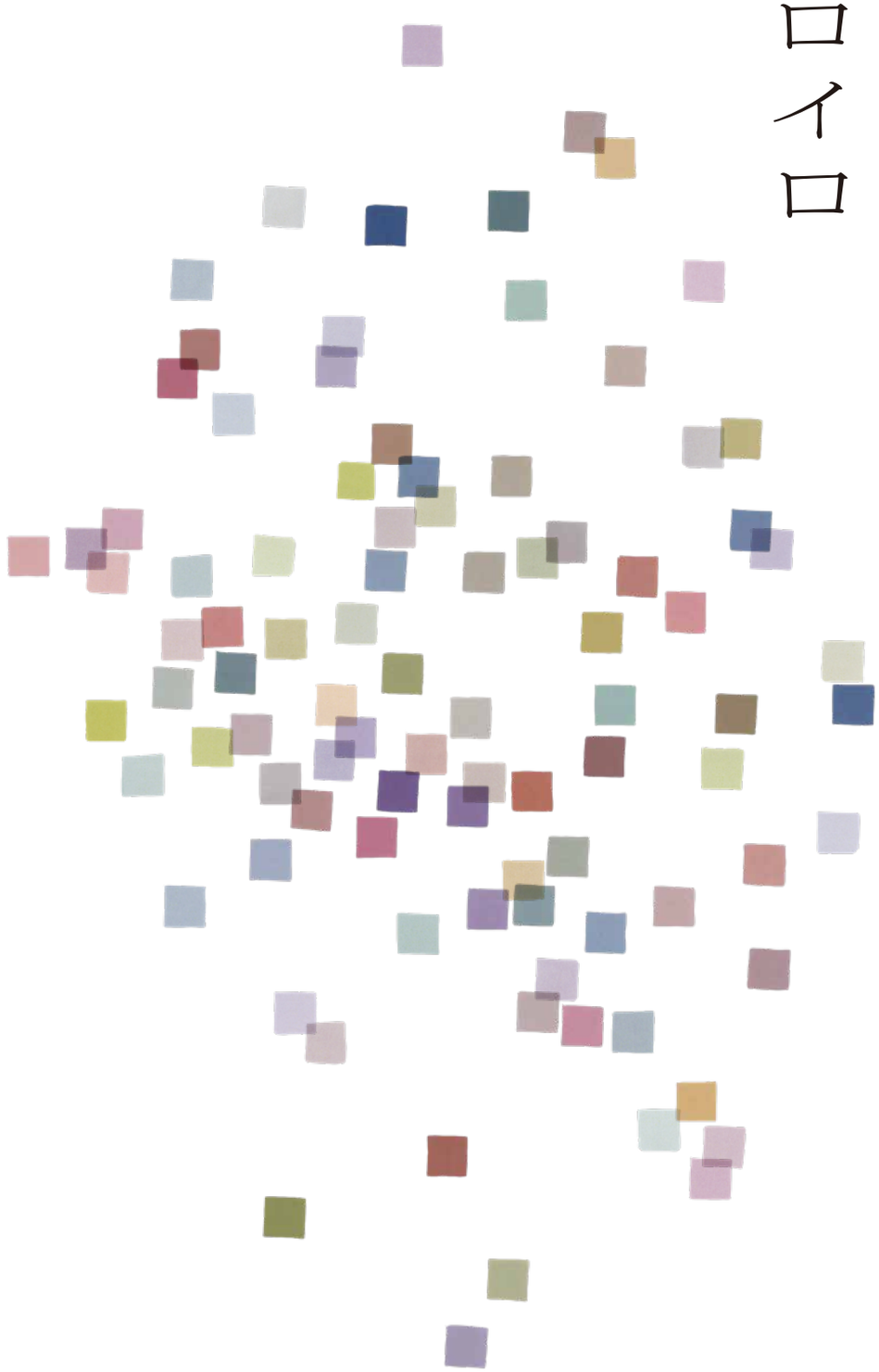
ホントカ。イロイロ

集まり　つながり　生まれ　広がる

まちの未来が生まれるばしょへ



ホントカ。イロイロ　発行元／新潟県小千谷市　2025 Printed in Japan

運営方針

わたしたちが
みんなの広場を
つくっていくために

「ホントカ。」宣言

「ホントカ。」は、
誰もが公正な立場で
安心して過ごせるみんなの広場です。
「ホントカ。」は、
わたしたちがつくり、わたしたちが利用し、
わたしたちが運営し、わたしたちが育てていきます。

1 **わたしたちは、多様な人々それぞれにとっての居場所となるみんなの広場を育てていくために、3つの自由(考え方の自由、過ごし方の自由、使い方の自由)を守ります。**

2 **3つの自由を守るために必要なルールは、わたしたち自身で対話を通してつくっていきます。**

3 **わたしたちは、個人や、組織や、地域の壁を超えてつながり、お互いに支え合うやわらかな関係をつくっていきます。**

4 **わたしたちは、多様な〈知〉を収集・編集し、公共のものとして共有することで、地域社会を豊かにするための運営を目指します。**

5 **わたしたちは、「ホントカ。」での体験や活動を通じて、まちづくりへの参画の力を互いに育んでいきます。**

★「わたしたち」とは、小千谷市民と小千谷市に関わる人々すべてを指します。
★本宣言では「広場」を「ひらけた共有の場(物理的空間だけではなくバーチャルな空間を含む)」という意味で使用します。

編集後記

こうして「ホントカ。」整備のプロセスをまとめると、ここまでに本当にたくさんの方々がそれぞれの想いをもってこの事業に関わられていたことを改めて感じます。まずは、ご協力いただいたみなさまに感謝を申し上げます。そして、限られた誌面の都合上、本誌でご紹介しきれなかった多くの方々の存在についても、ここで触れておきたいと思います。今後、「ホントカ。」を起点に、より一層豊かな活動と交流が展開されていくことを願っています。

本冊子について

「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」は、「共創」を大きく掲げ、その検討・整備を進めてきました。ここまで本当に多様な方が関わることで、「ホントカ。」は開館を迎えています。「ホントカ。」が今後も共創による運営を続けていけるよう、関わってきた方々の想いをここに記録し、つないでいきます。

[発行人]
小千谷市にぎわい交流課
[企画・編集・制作]
アカデミック・リソース・ガイド株式会社
[アートディレクション・デザイン]
長井真悟(OC1OBER)
髙橋栄一(ハシゴデザイン)
[写真]
佐久間清貴(EN studio works)
[文]
李明喜、有尾柚紀(アカデミック・リソース・ガイド株式会社)
[協力]
本事業の整備・本冊子の制作にご協力いただいた市民(市外在住の方含む)・学校関係者・事業者のみなさま

多様な人びとと共創する新しい拠点づくり

2024年9月、小千谷市本町1丁目に、「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」が誕生しました。「ホントカ。」は、図書館を核としてさまざまな機能が融合した施設です。子どもからお年寄りまで、幅広い世代にとって多様な使い方・過ごし方ができる施設を目指し、多くの方々と対話を重ねながら、その実現に向けた「共創」に取り組んできました。

開館に寄せて

「ホントカ。」のグランドオープンには、さまざまな年代、地域から多くの方々にお越しいただき、「ホントカ。」へ寄せられていた期待の大きさを実感しています。カウンター席で勉強する学生の方々、こどもとしょかんで賑やかに過ごす親子等、みなさんが思い思いに過ごす様子を拝見するなかで、一人ひとりの笑顔がとても印象的で、ようやくこの日を迎えられたことを感慨深く感じています。

本事業は「賑わい・交流・憩いの創出」を基本方針に掲げて進めてきました。20年前、新潟県中越大震災で小千谷は大きな被害に見舞われましたが、「ホントカ。」のオープンは、復旧復興後のさらなる発展に向けた大きな一歩であると感じています。シャッター街化が進む中心市街地で、新たな拠点として、さまざまな出会いや新しい文化との交流が生まれ、小千谷がさらに発展していくことを願っています。

小千谷市長
宮崎 悦男

ことの始まりと経緯 …… 03
リビングラボ　Living Lab. …… 05
座談会「リビングラボ　Living Lab.」…… 07
座談会「事業者選定」 …… 11
設計 …… 13
施工 …… 15
アイデンティティ …… 16
座談会「情報環境（図書館ICT） …… 17
管理運営・愛称 …… 19
未来展望 …… 21

ことの始まりと経緯

小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。整備のあゆみ

「ホントカ。」の整備のきっかけは、2012年までさかのぼります。長きにわたって市民の暮らしを支えてきた旧小千谷総合病院の統合移転と、その跡地活用、そして現在の「ホントカ。」が整備されるに至るまでの、さまざまな議論や取り組みをたどります。

旧小千谷総合病院（現在は移転）

旧小千谷市立図書館

事業の起こり
まちの賑わい創出への再出発。

2012年8月、市内2つの総合病院の経営統合基本合意が発表されました。本町商店街に立地し、古くからまちの中心として市民の暮らしを支えてきた「公益財団法人小千谷総合病院」の郊外への統合移転は、中心市街地のさらなる活力の低下が心配されました。そこで、小千谷市では、中心市街地の活力や賑わいを再創出するため、市街地のあり方や病院閉院後の土地の活用方法について検討を開始しました。

2016年3月、検討委員会による「西小千谷地区市街地まちづくりに関する提言書」を受け、小千谷市では「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画」を策定しました。

跡地の役割を「賑わい・交流・憩いの創出」とし、病院跡地に建設する新たな施設は、①核となる機能を図書館とする、②その他機能と複合させることにより相乗効果を生み出していくことを方針として示しました。そして、計画段階から市民が関わっていける方策を検討しながら、中心市街地の活性化を図っていくことになりました。

「図書館等複合施設整備事業」の主な経緯

公益財団法人小千谷総合病院
→ 2017（平成29）年3月末【閉院】
――
小千谷市立図書館の旧建物
→ 2024（令和6）年3月31日【閉館】

2012（平成24）年8月
市内2つの総合病院の経営統合基本合意。

2016（平成28）年3月
「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画」の公表

2017（平成29）年
「旧小千谷総合病院跡地整備計画」の公表、旧小千谷総合病院暫定活用開始（～平成31（2019）年3月）

2020（令和2）年12月～2021（令和3）年3月
図書館等複合施設設計業務 公募型プロポーザルの実施

2021（令和3）年3月
第1回小千谷リビングラボ（後に愛称「at！おぢや」と命名）の開催

2023（令和5）年
図書館等複合施設整備事業 情報環境構築業務 公募型プロポーザルの実施、図書館等複合施設内カフェ運営事業者公募型プロポーザルの実施、図書館等複合施設の愛称募集・決定

2024（令和6）年3月
図書館閉館イベント「THANK YOU 図書館 HELLO ホントカ。」の開催、「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。管理運営計画」の策定

2024（令和6）年9月28日（土）～10月20日（日）
「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。」グランドオープン、誕生祭の開催

市民の手でこれまでとこれからをつなぐ、旧小千谷総合病院の暫定活用

小千谷つながる未来プロジェクト
本田 啓邦 さん

小千谷青年会議所の委員を務めていたことをきっかけに小千谷つながる未来プロジェクトに参画。本プロジェクトの代表として旧小千谷総合病院暫定活用に取り組む。

「小千谷総合病院の建物を暫定活用したい」。当時、小千谷青年会議所のまちづくりに係わる委員長をしていた私にとっては、どうしたら良いのかわからず挑戦した難題でした。すべてが手探りで始まり、様々な活用を考えている人がいる中で、プロジェクトの会長として関わることになりました。とにかく毎回欠かさず参加することと、根気強く参加してくれているメンバーのみなさまとのつながりを最優先にしました。結果、会長とは名ばかりで、活用したいメンバーを支える一人のメンバーでしたが、暫定活用の最後には華やかなイベントを開催することができました。成果を申し上げるならば、お互いを支え合える仲間と巡り会えたことです。前途多難ではありましたが、良いご縁に恵まれましたことを心より感謝しております。

私が旧小千谷総合病院暫定活用に参加した理由は、音楽活動を通じて地域の活性化に寄与したいと思ったからです。

実際には「小千谷つながる未来プロジェクト」のメンバーとして各種行事をお手伝いさせていただいたのですが、特に印象に残っているイベントは、2018年7月に開催した「小千谷コミュニティーオペラ“愛の妙薬”上映会」で、市民オペラの感動を再び大勢のお客様に伝えられたことが懐かしい思い出です。

私が伴奏を務めるOSC合唱団も暫定活用期間にXmasコンサートを開催することができましたし、練習会場としても毎週使わせていただきました。

新施設「ホントカ。」が市民の憩いの場、新しい交流の場として賑わっていくことを心から願っています。

OSC合唱団伴奏者
小林 とし子 さん

OSC合唱団伴奏者というバックグラウンドを活かし、小千谷つながる未来プロジェクトメンバーとして、音楽イベントの企画等を中心に旧小千谷総合病院暫定活用に取り組む。

ドライフラワー作家
渡邉 穂菜美さん

刺繍作家
ななないろ。さん

本大好き!!
ぱんやさん

主婦
wa-latteさん

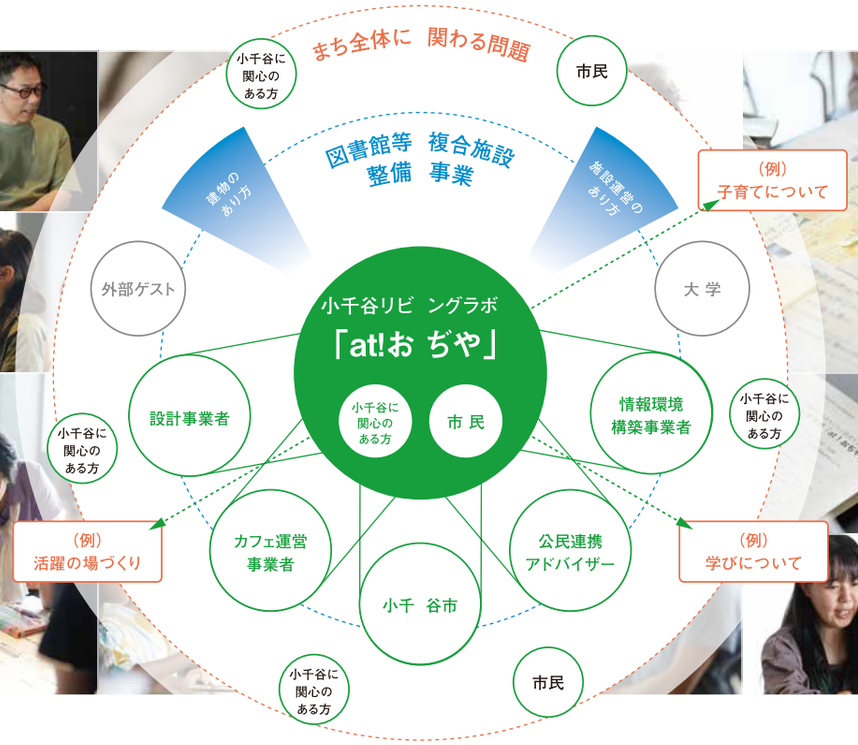
ホントカ。に展示中の
はにわ

デザイナー
まさきさん

リビングラボ　Living Lab.

これからの施設やまちを共に考えつくる場所

小千谷リビングラボ「at!おぢや」の
“これから”のイメージ



小千谷リビングラボ「at!おぢや」の活動履歴はコチラでも紹介しています。
https://www.city.ojiya.niigata.jp/soshiki/nigiwai/livinglab.html

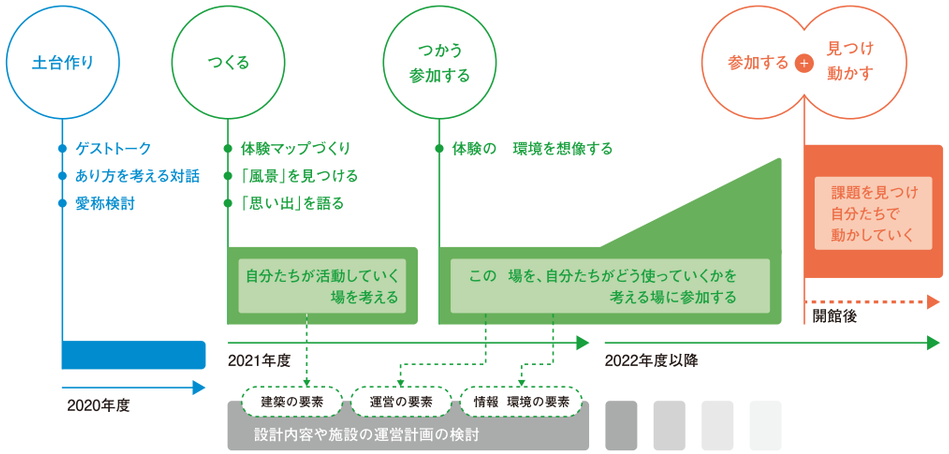
実験的な協働の場・活動
リビングラボ

リビングラボとは、「Living(生活空間)」と「Lab(実験室)」を組み合わせた言葉で、暮らしの現場を研究開発の場に見立て、多様な主体が対等な立場で考えを交流させ協働作業を行うことで、新しい社会的価値を生みだしていく場や活動のことを指します。

対話と活動を支える
共創のプラットフォーム

小千谷リビングラボ「at！おぢや」は、「ホントカ。」の整備に伴い、2021年3月に立ち上げた市民共創のプラットフォームです。本事業においては、整備段階から「共創」を重視し、施設の活用方法や地域の価値・課題などについて市民や行政、また本事業に関心のある多様な人たちが共に考えていく場として、対話と活動を重ねてきました。

小千谷リビングラボ　「at!おぢや」の展開



愛称決定の背景

at!おぢや

小千谷リビングラボ

小千谷リビングラボ第1回の対話のなかで、リビングラボの愛称を検討しました。「at(アット)」には、一点に集中する、集まるという意味があり、「at！おぢや」という愛称が市民の方によって名づけられました。みんなが一つの場所に集まって話し合い、最終的には老若男女が集まる施設になってほしい、また「あっと」驚くようなアイデアが取り入れられた施設になるといい、という願いが込められています。

子どもが遊べる場所もあって、すでにお気に入りスポット!

よ～すけさん

屋内広場のアスレチックから子どもが帰りたがりません(笑)

岩渕家

賑わいがある図書館。集中して読むには慣れが必要かな。

会社員
恵美さん

外観も内観もかっこいい。さすがの設計!

建築士
小林コウダイさん

ただの図書館じゃない。あなただけのワクワクを見つけよう!

インスタグラマー
おぢやおやじさん

好きな場所でゆっくり本を読めるのがお気に入り!

会社員
未起さん

座談会　リビングラボ　Living Lab.

対話を重ね、想いを描く

小千谷リビングラボ「at！おぢや」は、2020年12月にプレイベントとして開催したシンポジウム、2021年3月に開催した第1回リビングラボによってその活動を開始し、「ホントカ。」開館時点で約20回程の開催を重ねてきました。「at！おぢや」に、参加されてきた市民のみなさんと、企画・運営を支援してきたアカデミック・リソース・ガイド株式会社（arg）による座談会です。（本座談会は開館直前の2024年9月に実施した内容をまとめたものです）

「at！おぢや」参加当初の期待

■平澤：さまざまな地域で、拠点としての複合施設が計画されていて、そのなかには市民と協働した整備のかたちがあると聞いていました。この「ホントカ。」の整備にあたって同じような機会があると知り、ぜひ参加したいと思ったのが私の関わりのスタートです。スケジュールをやりくりしてすべての開催に参加してきたのですが、参加を重ねてこれて良かったと感じています。

■高野：私は出産を控えていた期間であり、後半は出られなかったのですが、「at！おぢや」には初回から参加させていただきました。初回時は、「何をするんだろう」という思いが強かったのですが、回数を重ねるごとにハードからだんだんとソフトの検討に入っていき、「ホントカ。」を市民自ら動かしていくことになるのだと実感していきました。自分たちでやっていいんだ、考えていいんだという感覚が非常に新鮮で、それが期待やワクワクする気持ちにつながっていきました。

■庭野：私はプレイベントのシンポジウムに参加していまして、それも印象に残っています。この施設整備事業スタートとしてのお話とゲストのお話の内容に興味があったのがきっかけでした。そこから参加していくことになったのですが、「共創」や「共に」という言葉を繰り返し強調されていて、すごく印象深かったですね。

「at！おぢや」の開催と参加を重ねて見えてきたこと

■高野：私は当初、ここでやることを具体的に決めるんだというくらいの気持ちで参加したら、「決める」というところから少し遠いところにテーマが設定され、対話をするような内容になっていて、そこにギャップを感じました。当時は気持ちが先走ってしまい、こんな遠いところから決めていくんだというモヤモヤした感情もあったと思います。でも知らない人同士が集まって意見を言い合っても、そう簡単に決めることはできないですよね。発言することが苦手な人も含めて、場を温めるというところから少しずつ段階を踏んで進められていたのだなと、いま考えるとわかります。

■平澤：本日「at！おぢや」についての座談会ということで、第1回からの開催報告を見てきました。振り返ると、一つひとつの開催内容に意味があったんだな、ということが非常によくわかります。基本的なコンセプトについての対話から始まり、回を重ねながらこの地域に対しての人々が描く思いが滲み出ていき、それを設計の方が一つひとつかたちにしてくださったのだと思います。だからまさに、「ホントカ。」は参加した人たちの意見がつくり上げた空間になったと感じます。また、後半のほうになってくると、かたちになってきた空間を、どうやって使っていこうかとみんなで具体的に意見を出し合いましたよね。いまとなってみると、一つひとつが積み重ねで、それが最終的に「ひと・まち・文化共創拠点」という施設のテーマとしてまとまっていったのだと感じます。

■庭野：小千谷には話すこと自体慣れていない人が多いなという感じはしますよね。言いたいことはあるんだけれど、わざわざ参加してまで話せるわけでもないし、文句を言う人ほど参加はしないということもあります。来れば楽しいと思うんですけどね。普段会わない方とも出会えて、一つのテーマで話をすることも、なかなかできないことなので、私にとっては貴重な場でした。そういう意味では、「ホントカ。」の開館は「at！おぢや」としても再スタートなのではないでしょうか。この場を使いつつ、そういう対話の文化が少しずつ浸透していくといいなと思っています。

■有尾：いろんな方にご参加いただけるということや、いろいろな考え方を交わし合うことができる面白さがある一方で、こういうことって、もどかしさとのせめぎ合いみたいなところもありますよね。そこに楽しみを見いだされる方もいらっしゃったり、最初はよくわからないなと感じられた方が、時間がたって振り返ってみると何か積み重ねたものを実感されることもあったりするのかなと思います。一方で、「at！おぢや」という場自体は、一度参加したとしても、途中で離れることも、また戻ってくることもできるゆるやかな場を目指してきた側面があります。ずっと参加してきたからわかることもある一方で、一回出てもまた戻ってくることが許容される関係性も含めて、柔らかいプラットフォームとして運営が続いていくといいなと思いました。

未来に向けての可能性や期待、実現したいこと

■平澤：やはりいろいろな人が垣根を超えて交流できる機会になれたらいいですね。普段は話をする機会のない人たちがここで交流して、何か新しいものを生み出したり、昔のことを思い出したり、発掘したり、そういう拠点になれるといいなと思います。

■高野：「ホントカ。」の開館は、10年、20年、もっと先までずっと続けていけるような、何年先でも市民が集まるのはここだよねと、愛着をもってもらえるような施設に成長するためのスタートだと思います。完成がゴールではなくて、ずっと先の世代もここに集まれば何かできる、新しい発見ができる、それが続いていく運営にしていきたいなと思っています。

■庭野：私の目標は、ボランティアなり何かしらのかたちでずっと関わっていくことです。また、そういう人たちが増えたらいいなと思います。前の図書館ではできなかったイベントなど、参加も、開催もしてみたいし、運営のお手伝いというか、できることをみなさんと一緒にやっていけたらいいなと思っています。

■有尾：本当にそうですよね。さまざまなことができる施設だからこそ、関わり方もどんどん多様になっていくはずで、より面白くなっていくのではないかなと思っています。関わる人や関わり方も、今後どんどん広がっていくといいなと願っています。

小千谷市民
平澤 智 さん

「at！おぢや」参加者。すべての開催に参加。小千谷市議会議員も務めるほか、地域でさまざまな活動を展開している。

小千谷市民
庭野 悠子 さん

「at！おぢや」参加者。「at！おぢや」や、そこから派生したコミュニティ「ホンダナ～」（p.22参照）にも夫婦で参加し活動している。

小千谷市民
高野 ちさと さん

「at！おぢや」参加者。「ホントカ。」の敷地に隣接するたかのスーパー営業に従事。

アカデミック・リソース・ガイド株式会社（arg）
有尾 柚紀 さん

2020年から事業の支援事業者として参画し、小千谷リビングラボの立ち上げから、企画・運営を支援してきた。

COLUMN

出張at！おぢや「ふるさと夢づくり教育」

市立図書館長（当時）
小池 尚子 さん

学校側の「ふるさと学習で子どもたちに豊かな経験を仕組みたい」という願いと、市側の「中学生とも一緒に事業をつくっていきたい」という願いが合致して授業は実現しました。小千谷の新しい施設にかける夢を、子どもたちは実に素直に意欲的に語ってくれました。「ホントカ。」を舞台に、あの時の子どもたちが描いたそれぞれの夢を実現する日が近づいています。

小千谷市立南中学校での授業の様子

来館3回目。いろいろおもしろ過ぎてまだ本を読めてない（笑）。

デザイナー
長井さん

子どもが思いっきり遊べてよかった！

いかった！

目崎亜紀子さん・結叶さん

私は別名微笑仏。皆が楽しそうにしているのは微笑ましい。

ホントカ。に展示中の
木喰仏

COLUMN

新潟工科大学との連携プログラム「公共施設づくり・まちづくりをイノベーションする」

新潟工科大学 教授
倉知 徹 さん

大学での学生の学びは、講義室等での受動的な学びになりがちです。しかし「ホントカ。」整備での大学連携事業においては、建築ができるプロセスのみならず、市民が参加し施設を創っていく熱気を、学生たちが直に感じることができました。まさに「ひと・まち・文化共創」になったと感じています。

新潟工科大学でのグループワークの様子

最高の建築と眺望！ウェディングフォトに良いかも。

フォトグラファー
佐久間さん

地形になじんでる。大きな窓際を歩くだけで気持ちいい。

建築関係
柳 貴之さん

綺麗でイベントもたくさん！新潟市から通いたい！（笑）

デザイン学生
片野ひなたさん

日の出

新たな拠点、そしてまちの未来をどうつくるか

旧小千谷総合病院の閉院を受けた各種取り組みや検討を経て、
「賑わい・交流・憩いの創出」を基本方針として
図書館を核とした複合施設の整備がいよいよ動き出します。
何を目指し、そのために具体的にどのようなことに取り組んでいくのか、
そうしたことから丁寧に対話と検討を始めていく、
「ホントカ。」整備（図書館等複合施設整備事業）の日の出です。

座談会　事業者選定

覚悟を持って選び、共に歩み続ける

市の職員と、さまざまな事業者の協働で、「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。」の整備が進められてきました。事業者の参画にあたっては、公募型プロポーザルによる選定が行われてきましたが、方針づくりや審査のあり方、議論にも、本事業ならではのさまざまな工夫がありました。そうした各種プロポーザルの審査委員や事務局を担ってきたメンバーでの座談会です。
（本座談会は開館直前の2024年9月に実施した内容をまとめたものです）

※PFI：Private Finance Initiative（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）。公共施設の設計・建設・維持管理・運営などを民間の資金や経営能力、技術力（ノウハウ）を活用して行う手法。

事業への参画の経緯

■澤田：2016年の「まち・ひと・しごと創生法」の検討の際、市から相談をいただき担当をしたのが、私が小千谷のお手伝いをした最初だったかと思います。その後、旧小千谷総合病院の統合移転が決定し、その跡地の再構築と地域の活性化の検討に関わることになりました。旧小千谷総合病院跡地の利活用については一度PFI（※）事業として実施することとなり、公募し進めていたのですが、不調という結果となり、事業の見直しを図ることになったという経緯があります。

■土田：私は西小千谷地区市街地まちづくり基本計画策定後の2016年4月からこの事業の担当者となり、病院の暫定活用をかたちにしていくことが最初の仕事でした。

■平賀：私は、2018年の8月にPFIの審査委員会の準備で小千谷を初めて訪れました。ちょうどその頃、私は県立長野図書館の館長として、みんなと一緒に「これからの公共空間をどうつくろうか」というテーマに取り組んでいました。おそらく土田さんがそのときのイベントに参加してくれたと記憶しています。それをきっかけに土田さんからお電話をいただいて、あのようなみんなで場所をつくっていくことをぜひやりたい、プロセスを考えるところでも一緒にできませんか、というお誘いを受けて、この事業に参加することになりました。

■佐藤：私が2019年に都市整備室の室長として所管部署に着任したときには、すでに事業の方向性が決まっていました。その際はPFI事業で進めていくという方向性で頑張ってきたところ残念な結果となってしまいました。それも踏まえていまがあるわけですが、澤田先生にも平賀さんにもいろいろな面でサポートしていただいて、このようなかたちで無事オープンを迎えることができ、大変ありがたく思っています。

■李：われわれは、一度事業が止まった後、事業の見直しを支援する形で関わりはじめることとなりました。ここにいるメンバーは、事業への参加のタイミングがバラバラであることが面白いですね。元々澤田さんが市と計画づくりをされていたと思うのですが、途中から入られた土田さんが平賀さんにつなげて、それが全体としてのチームになっていったように、土田さんがハブの役割を果たしていたと思います。

プロポーザル審査のなかで起こったこと

■李：プロポーザルにおける特徴だった点はいくつかありますが、審査委員のみなさんが中心となって議論を進めながらも、市の職員のみなさん、図書館の職員のみなさん、われわれ事業者も対話に参加できる機会があったというケースはこれまでになかったと思います。

■平賀：審査のなかで、澤田さんが最後に「このプロジェクトはチャレンジするんでしょ、だったらどちらを選ぶのだろう」という問いかけを私たちにしたことが印象的でした。チャレンジしてみる価値があるんじゃないかと、事務局を含む審査委員会のなかで踏ん切りがついた瞬間がありました。それが今につながっていると思います。

■澤田：行政の人たちも同じ覚悟と手間をかけましょう、ということを言いたかったんです。市民が手間をかけるだけじゃなくて、同じだけの手間を行政もかけるということが、今の時代の行政と住民の協働なんじゃないかなと思っていたためです。やっぱり面白いものにみんなでチャレンジするほうが良いアイデアも出るのではないかと思っていました。

■平賀：そういう意味では、小千谷が目指した共創のプロセスへのチャレンジでもあったと思うんです。覚悟をもって市民と共に進めていく覚悟が必要なのだ、と行政職の一人ひとり全員に意見を聞きしましたよね。
また、このプロポーザルでは90分間の対話（ダイアローグ）を実施しています。こうした対話をするということも、非常に新しいことだと思います。プレゼンだけではわからない部分、あるいはプレゼンの提案を超えた対話ができたのは非常に大きかったと思います。公共空間のプロポーザルのターニングポイントだったと言っても過言ではないと思っています。

■佐藤：「ホントカ。」がこれから新しい事例として全国に出ていき、このプロセスを参照して、さらに進化したものが出てくるといいと思います。その参考になるものとして小千谷版を示していきたいです。建築も運営もオープンしたあとに評価していただける、期待される、また人がたくさん集まるような施設にできればいいなと思います。

■土田：こういったプロセスは、この事業だけで終わらせるのはもったいなくて、ほかの事業にも波及していってほしいと思っています。住民と共に暮らしを創る姿勢が、まち全体としても注目され、選ばれるまちになっていくのではないかと考えています。

兵庫県立大学大学院
減災復興政策研究科准教授
澤田 雅浩 さん

西小千谷地区市街地まちづくり基本計画検討委員会委員長を務め、本事業の始まりから検討に関わってきた。PFI事業 公募型プロポーザルの審査委員長、施設設計業務 公募型プロポーザルの審査委員長を務める。

前県立長野図書館長
平賀 研也 さん

施設運営準備支援業務アドバイザーとして本事業の検討を支援。施設設計業務 公募型プロポーザル審査委員のほか、PFI事業 公募型プロポーザル審査委員、情報環境構築業務 公募型プロポーザルと施設内カフェ運営事業者公募型プロポーザルの審査委員長を務める。

小千谷市職員
佐藤 俊夫 さん

小千谷市にぎわい交流課長。2019年に当時の本事業の所管部署であった建設課都市整備室長に着任。施設内カフェ運営事業者公募型プロポーザルの審査委員を務める。

小千谷市職員
土田 昌史 さん

旧小千谷総合病院暫定活用から開館に至るまで本事業を担当してきた。すべてのプロポーザルの事務局を務める。

アカデミック・リソース・ガイド株式会社（arg）
李 明喜 さん

2020年、旧小千谷総合病院跡地整備事業官民連携支援業務を受託し本事業を支援してきた。施設内カフェ運営事業者公募型プロポーザルの審査委員を務めるほか、本事業に参画以降各プロポーザルの実施支援を行ってきた。

受験勉強で利用中。勉強スペースをもっと多くしてほしい。

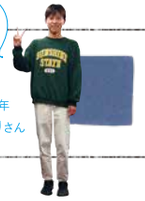
中学3年
こうがさん

静かにしなければ、という概念が覆される「明るい図書館」。

ハンドメイド作家
La Mer BLeu光咲さん

ホントカ。サイコー！

SANJO PUBLISHING
水澤さん



友達と週2で来て楽しく勉強しています。

中学3年
きらりさん

人の暮らしや文化の融合も感じられる素敵な空間。

大学生
あいかさん

屋上からの景色も良く、ほっとひと息つける場所。

看護師
プーさん

設　計

変化しながら引き継がれ、未来につながる現代の聖地

©Daici Ano

小千谷の記憶、風景と響き合う建築

敷地に初めて立ったとき、越後三山がことのほか美しく見えるのに驚きました。ここは魚野川がつくった谷を介して越後三山に正対する、小千谷のなかでも稀有な場所です。新しい図書館がつくられるこの場に、かつては公益財団法人小千谷総合病院があり、この風景を多くの小千谷市民が知っていることは、偶然ではないのではないか。ここに求められているのは、単なる図書館ではなく、人々が折々にさまざまな仕方で集まる特別な広場、ある種の聖地のような場所なのだと、そのとき思いました。

プロポーザルへの参加を決めたのは、「情報空間と実空間の融合」という、公共建築のコンペには珍しい理想が掲げられていたからです。そこで、普段はしないような、できるだけかたちのない仕組みを提案しようと思いました。そこで、フロート／アンカー／ルーフという建築的デバイスの提案をしました。フロートとは、レールに沿って動く書架をはじめとした、動く家具のことです。アンカーとは、具体的に人々が特定の目的のために集まる場、ルーフとは、3メートルの積雪に耐える、大きな屋根のことです。

フロートという新しい仕組みを運用するうえで理解を深めるために、図書館職員、市職員と一緒に、ブックトラックと模型を使ったワークショップを行いました。動く書架は図書分類に対応し、レール上を動きます。したがって時々に異なった分類の本同士が出会います。本棚の書籍のうち、何冊かをピックアップして面陳すれば、異なる分類の本たちが織りなす、島のようなもの=「小さな資料のまとまり」ができます。情報空間ともリンクするような無限の組み合わせが可能なのです。時々の自然やイベントが織りなす小千谷のバイオリズムを反映する、資料と情報のフィールドが生まれます。

次に小千谷リビングラボ「at！おぢや」の活動の一環として、どのように使いたいか、一日のなかでどのように利用しようと思うかなど、設計につなげるワークショップを行いました。この建物は図書館であると同時に資料館でもあり、また本と関連したさまざまな市民活動のための場所でもあります。限られた面積と利用時間帯による棲み分けのために、どんなアンカーたちが必要なのか、京都大学平田研究室の学生たちと協働し、ワークショップで得られたヒアリングデータをもとに、活動同士のネットワーク図、アンカーのデザイン、さらにアンカーの配置を決めるためのプログラミングを行いました。この方法で、さまざまな意見を聞き漏らすことなく反映するようなプランニングを行ったのです。

ワークショップを通して、思い出の写真イメージや言葉から小千谷の人々の記憶と地形的なものが深く結びついていることもわかりました。小千谷は信濃川と魚野川の合流地点にあり、山本山の硬い岩盤によって流れが幾重にも蛇行した結果生まれた、複雑な河岸段丘を特徴としています。屋上にも河岸段丘のような凹凸をつくり、小千谷全域のさまざまな場所やイベントのいずれにも向かう多方向的なものとしています。また屋根はトラスを内包した厚みのあるものとし、天井面には新潟の地形や、小千谷縮の皺のような、多方向的なひだを与え、ルーフ下がさまざまな活動をやわらかく包んでくれるような空間となるように考えました。

地形のようなルーフの下に、越後三山の風景が取り込まれ、アンカーに囲まれたフロートのフィールドが広がります。自然やフロート、市民活動によって刻一刻と変化するこの場所は、小千谷の人々の心を映し出す、借景の庭のような場所なのではないか、と思います。

小千谷は火焔型土器（縄文土器）が出土する土地柄ですが、考えてみれば、縄文人たちもこの辺りから、越後三山の風景を見ていたはずです。してみるとここは、今を生きる人々のまなざしと、遠い過去のまなざしが重なり合うような場所でもあります。言い換えるなら、今ではないいつか、ここではないどこか、私ではない誰かが流れ込み、現代を生きる小千谷の人々の活動と響き合うような場所であると。それは、本や情報というものとも相性が良いはずです。なぜなら本は時間を超えた誰かからのメッセージであり、情報というものも場所や時間を超えて響き合うものだからです。ここが、大きな時間の流れのなかで変化しながら引き継がれてきたもの、そして揺れ動きながら未来にもつながっていくものを感じながら人々が集まる、現代の聖地のような場所になっていくと素晴らしいなと思います。

株式会社平田晃久
建築設計事務所
平田 晃久 さん

旧小千谷総合病院跡地整備事業 図書館等複合施設設計業務 公募型プロポーザルにて優先交渉権者に選定され、本事業に参画。「ホントカ。」の建築設計を手掛ける。

建築に込められた工夫と可能性

小千谷市建設課
関 輝彦 さん

「ホントカ。」建設における施工業務全般に対して監督員を担った。

今回の設計は、いま注目を集めている新進気鋭の建築家・平田晃久氏率いる平田晃久建築設計事務所が、公募型プロポーザルにて、フロート、アンカー、ルーフを取り入れた斬新な建築の提案を行い、選定されました。設計期間は15ヶ月にわたり、官民参加型のワークショップ「at！おぢや」への参加を通じて、多岐にわたる利用者の行動を予測し、コミュニティーのための活動の場であるアンカーの配置を決定しました。

また、敷地の高低差を巧みに表現し、建物内からでも自然の織り成す風光明媚な景色に浸れます。館内はコンクリートとガラスなどの無機質な素材で構成されていますが、蛇腹折の和紙天井や柔らかな素材のカーテンなどを取り入れることで、不思議と温かみのある空間を体感できます。何度でも訪れたくなる平田建築の世界を多くの方々に感じていただければと思います。

学習する場所であり友達と会話する場所です。

中学3年
たまカービィさん

色んな人がやりたいことを叶えるための場所になったらいいなぁ。

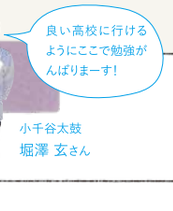
コミュニティマネージャー
まなてぃさん

ポジションはCBです！ここには本読みに来ます！はい！

中学3年
じょんさん

若い人があつまる場所になったらいいなぁ

小千谷太鼓
佐藤 司康さん



良い高校に行けるようにここで勉強がんばりまーす！

小千谷太鼓
堀澤 玄さん

新潟市在住です。近所に「ホントカ。」がほしいです！

デザイン学生
中川 たかとしさん

本を読むのが大好きです！さらに蔵書が増えることに期待！

会社員
中村 峰夫さん

施　工

中心市街地に姿を現した新たな拠点「ホントカ。」

豊かな発見と活動の源となる施設の実現へ

旧小千谷総合病院が建っていた信濃川と越後三山を臨める特別なこの場所に、人やまち、文化などさまざまな小千谷を内包し、市民のみなさまにとってより豊かに新しい発見がある、活動の源になる施設を実現することがわれわれの役割であると思い、プロポーザル段階から設計・現場監理まで携わってきました。

最も印象的だったのは、まちのスケール感のアンカーが建ち、ルーフの全容が見えてきた段階です。信濃川沿いに続く谷と山並み、丘陵と田園風景、山や台地に登る坂、積雪時の分厚さ、信濃川のきらめきなど、小千谷の様相を現場のなかで感じました。できた空間だけでなく、工事過程や見えないところにも小千谷の記憶が内在している、風景と共鳴する建築に携わることができとても良い経験を得られました。

積雪に関して多少影響はあったものの、無事オープンへバトンをわたすことができ、胸をなでおろすと同時に、これからの「ホントカ。」に期待を抱いています。

最後に、市の担当の方々、施工者・関係者のみなさまへ、厚くお礼申し上げます。

株式会社平田晃久
建築設計事務所
北島 瑛登 さん

「ホントカ。」建築設計を手掛けた平田晃久建築設計事務所の設計・現場監理担当として、設計から施工時までの現場との調整・監理を担った。

さまざまな技術を駆使したイメージの具現化

本建物はデザイン性が高く、施工が大変難しい、というのがいちばん最初に感じた印象です。

施工にあたり、設計イメージを検討する際に、BIM（3Dイメージデータ）を構造、意匠、設備ともに使用して、設計とイメージのすり合わせを行い、決定した内容をもとに施工業者へイメージを共有し、施工を実施しました。ただ、イメージデータだけでは細かな部分のおさまりの理解が非常に難しかったため、3Dプリンターを使用して模型を作成し、3Dイメージデータと模型を施工業者と確認しながらイメージをすり合わせ、実物に反映させることが大変苦労した所です。

「ホントカ。」は、意匠のインパクトをいかに目立たせるかを実現するためにBIM、AR、3Dプリンター、点群測量等を使用して、ICTを駆使したからこそ完成できた建物だと思います。

株式会社奥村組 東日本支社
井村 朋大 さん

「ホントカ。」の施工業務における工事主任を務め、施設完成までの現場全体の管理を担った。

新潟市
小林家さん

中学3年
かずきんぐさん

ホントカ。パート
大橋章子さん

アイデンティティ

可変的な施設のあり様を表す視覚的な表現への挑戦

多様な要素が集まり広がるデザイン

小千谷市ひと·まち·文化共創拠点

まず、施設の愛称「ホントカ。」というネーミングが面白いなと感じました。「本とか、他にもいろいろあるよ。」という意味や「ホントか!?」と驚きワクワクする気持ちを表しているとのことで、そうした驚きや面白さをかたちにしたいと思いました。

実は、愛称が決定する前のタイミングから、基本となるVI（※）計画等の検討は進めていました。小さな単位から広がっていくという共通のコンセプトを設計者の平田さんと固めており、そこはブレることなく最小単位の点やアイコンなどを組み合わせながら検討を進めていきました。

見たときの印象としての存在感の強さは大事なことですが、一方で、ある意味不完全な状態で、見た人がそこに自分なりに足していくことで成立したり、かたちを変えていくという考え方が、この建築に合っているのではないかと考えました。

そうした考えから提案したものを、市のみなさんとの協議のなかでチューニングを重ね、このようなロゴが完成しました。

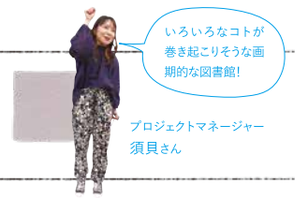
アフォーダンス株式会社
平野 篤史 さん

図書館等複合施設設計業務における施設のVI・サイン計画、ロゴデザイン等の担当として本事業に参画。

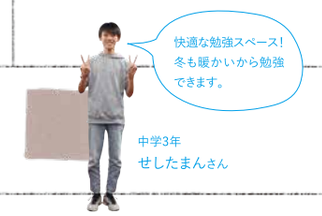
「ホントカ。」が、人、アイデア、新たな出来事、知的情報、文化情報が集結し、また広がっていく場であるというイメージをもとに、施設のサインは、小さいかたちの集合体（雪や錦鯉のうろこ、信濃川の石や生物、または、言葉といった最小単位）が集まり、大きなかたちを形成していくというコンセプトでデザインされています。

※VI：Visual Identity
（ビジュアル・アイデンティティ）。
（この場合は施設の）価値やコンセプトを視覚化して伝えるデザイン要素全般のこと。

介護職員
新保豊子さん



プロジェクトマネージャー
須貝さん



中学3年
せしたまんさん

座談会　情報環境（図書館ICT）

情報環境を通して育む新しいカルチャー

本事業では、当初より実空間（建築）と情報空間（デジタル）の融合を掲げ、検討・整備を進めてきました。
「ホントカ。」におけるこうした新しい情報環境の構築に関わってきたメンバーによる座談会です。
（本座談会は開館直後の2024年10月に実施した内容をまとめたものです）

コトノハ

「コトノハ」は、二次元バーコード（一部RFID）を添付したカードを介して、リアルの空間から「ホントカ。」ウェブサイト上で利用者が公開したデジタルコンテンツにアクセスすることができるサービスです。「ホントカ。」館内（またはまちなか）のあちこちに散りばめられ、このまちの誰かの関心や物語につながる入口となります。スマートフォン・タブレット端末で二次元バーコードを読み取ると、本などの資料や地域の「ひと」「もの」「こと」などのさまざまな情報に出会うことができます。

コトノハ

読み取る

※画面はイメージです。

情報環境の企画・提案に込めた想い

■氏原：設計者である平田晃久建築設計事務所（以下、平田事務所）の提案は、「本」を重視した提案になっているんです。情報環境が豊かになっても、本を読めないと情報環境も生かせないという考え方が根底にあります。検索して読みたい本を取りに行くのではなく、本を探し回って選べる環境、セレクタブルな環境をつくりたくて、「小さな資料のまとまり」が点在しているような施設イメージを考えました。こうした考え方を平田晃久さんに伝えたら、レールに本棚を載せるという案が出てきました。その動く棚の記録や、棚と棚を情報環境で結ぶようなことができるといいのではないか、そうするとブラウジング（※1）が自然とできるようになっていくんじゃないか、というようなことを話して企画がまとまっていきました。
その後、大橋さん率いるサイフォンさんが中心になってJV（※2）でチームを組んでいただき、プロポーザルに参加いただきました。平田事務所のほうでフロートとアンカーとルーフという3つの要素（p.13-14参照）を提案しているのですが、JVチームからの「言の葉の栞」（現：コトノハ）という提案が、この3つの要素にプラスした4つ目の要素となってくるようなインパクトを感じていました。

情報環境構築に向けたチーム組成

■大橋：チーム組成にあたっては、コミュニティとアーキテクチャがあったのですが、そこに名乗りを上げてくれたのが今日参加いただいているDERTAさんと、KUNOさん（株式会社KUNO、アーキテクチャ分野を担当）でした。地元の2社の熱量によって新潟でつくるんだ、これをやり切るんだという思いがあったからこそ参加したというところはありますね。
■坂井：情報環境のコミュニティ分野の担当とはいえ、そもそも自分が認識している図書館は普通に本の貸し借りをするだけの場所でしたので、小千谷でつくろうとしている図書館像を学ばせていただきながらチャレンジしたかたちです。
ただ一方で、情報環境でつくられている内容をユーザーに伝えていく役割がコミュニティにあると思っています。そういった意味で、ユーザーにいちばん近い立場で関わることができたというところは、われわれの役割としても大きかったのではないかと思っています。

情報環境の構築プロセス

■大橋：われわれが検討を始めるとき、平田事務所が進めてきた下地をベースに、まだ検討ができていないところは何かというところから議論しました。情報環境設計としては、平田事務所が想定しているデザインパターンに対して、うまく利用者の行動が重なる仕組みをつくっていくという考え方で提案をしました。よくタッチポイントという言葉を使うのですが、いま「コトノハ」として検討しているものもその一つですね。実はアナログの部分の検討にもかなり力を割いているんです。アナログの力って実は大きくて、「コトノハ」も、みなさんがいろいろ触ってくださっていくなかで、「コトノハ」というカルチャー自体がどんどん生まれていっています。そこからどのようにデジタルに伸ばしていくのかという段階にようやく来ているかなと思って楽しみにしているところです。
それから、情報環境としては「ホントカ。」のなかだけで考えていないのです。小千谷のまちで、「コトノハ」の機能が使われるということを想定しているので、外にもつながるハブとしてのデザインを考えています。持ち出せる情報環境ということ、ここは強調しておいてもよい部分かなと思っています。

市の職員から見た情報環境構築

■石黒：私が本格的にこの事業に関わりはじめたのが、情報環境のプロポーザルからだと思うのですが、なんだかすごい人たちが目の前にいてすごいことを話していらっしゃる、というのが率直な印象でした。プロポーザルの際に市側から、「みなさんがこうした素敵な提案をしてくれたのですが、市のほうが追い付けない可能性がありますけど大丈夫ですか」という質問があり、私もまさしくその不安をもっていたところ、大橋さんが、「それを引き出すのがわれわれの仕事なんですよ」という素敵な言葉をいただいたと記憶しています。そういう姿勢を含めて、気後れしながらもいままで関わってこれているのだと思います。先ほど大橋さんからお話があったとおり、地域にどうやって広げていくのかは大きな課題でもあるので、ささやかながら「コトノハ」の将来への展望ももっています。いまいる「ホントカ。」のメンバーで、しっかりとスタートダッシュを切って、みなさんに広げていくというのも大事ですが、この思いを次にくるメンバーにもうまくつないでいきたいなと強く思ったところです。これを5年、10年、長く残していけるように私も微力ながら頑張っていきたいと思いました。

※1 ブラウジング：語源は英語の「browse」。「拾い読みをする」「ざっと見る」という意味。
※2 JV：Joint Venture（ジョイントベンチャー）。複数の企業が互いに資金を出し合って新しい会社を設立し、事業を行う組織体。

株式会社国際開発コンサルタンツ
氏原 茂将 さん

図書館等複合施設設計業務における情報環境（企画）担当者として本事業に参画。情報環境基本・実施計画の策定から、その実装における支援を担った。

サイフォン合同会社
大橋 正司 さん

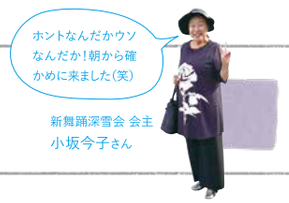
情報環境構築事業者として参画し、サービスデザイン支援、システム構築、インターフェースのデザイン等の統括を担った。

株式会社DERTA
坂井 俊 さん

情報環境構築業務におけるコミュニティデザイン分野の担当責任者として参画。

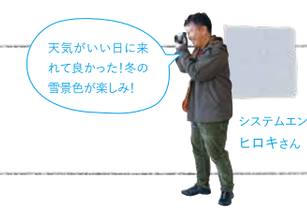
小千谷市職員
石黒 恵里奈 さん

行政、また図書館の担当者として、図書館システムの実装に向けた調整等を担った。

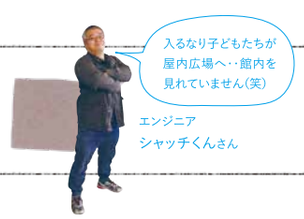


新舞踊深雪会 会主
小坂今子さん

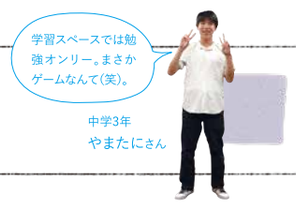
中学3年
おさむさん



システムエンジニア
ヒロキさん



エンジニア
シャッチくんさん



中学3年
やまたにさん

会社員
りのちまんさん・まなおさん

管理運営・愛称

互いの価値観を共有し合い 取り組むユニークな施設づくり

「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。」の整備にあたって、主に2022年頃から管理運営分科会を立ち上げ、継続的に施設の管理運営について議論しながらその検討を進めてきました。施設全体の方針や、事業の枠組み等を取りまとめた「管理運営計画」の検討のほか、配架や共創のあり方の検討に至るまで、検討の項目は多岐にわたります。こうした「ホントカ。」の管理運営をテーマに、開館に向けた検討・準備に携わってきた小千谷市にぎわい交流課 共創推進係メンバーでの座談会です。（本座談会は開館直前の2024年9月に実施した内容をまとめたものです）

「ホントカ。」の管理運営の検討のなかで印象的だったこと

■高野：私が最初に管理運営の検討会議に参加したときは、まだ現在のように事業を推進する部署が一つになっていませんでした。そうしたなかで、施設のこの場所ではどういう活動ができるか、どういうことがしたいかを、他の関係課職員も一緒に集まり、みんなで話し合ったことが印象に残っています。いままで新しく施設をつくることの経験がなく、そのような場を設けて仕事をしてきたこともなかったので、「at！おぢや」にしてもそうですが、そうした対話の場を何回も設けて積み重ねていく、非常に丁寧なつくり方をしていく施設なのだな、と感じていました。そこで話し合ったことには、実際実現できそうなこととできないこととがあるかとは思うのですが、話し合ってきたことやいろいろな人の想いがようやくこうやってかたちになってきていることに、感慨深さを感じます。

■吉田：私は育休を経て今年度の4月から着任しました。異動してきて初めてこの施設を間近で見たときは、こんな大きく立派な施設が小千谷にできたんだ、というのが素直な感想でした。長い間広報を担当していた経験から、PRの面や、子育て当事者として子どもに関する分野などを任されていくことになるのではないか、そうしたことに力を発揮できればいいなと思っていました。そういったワクワクした気持ちだけで着任しましたが、周りの職員を見ていると、楽しみなこと以上に不安なことやいままでの苦労がたくさんあったのだろうということも感じています。管理運営会議も私はまだ数回しか参加していませんが、私にとっては会議の開催頻度や議題の多さ自体が印象的でしたし、内容の濃さからも、みなさんが何年も対話を重ね、たいへんなことを乗り越えてきたんだろうということを、4ヶ月働いて実感しているところです。

検討における悩ましさや難しさ

■白井：「難しさ」というところでまず感じているのは価値観の多様さについてです。価値観というのは人それぞれで、各々の仕事や人間性によって本当に多様に広がっているものです。そのうえで、「ホントカ。」は、その多様な価値観を支えるものとして、施設の機能や情報、活動などを融合させていくことを目指していくわけですが、言葉でいうほど簡単なことではありません。多様な価値観をもっている前提で、関係する人同士、なかなか理解し合えない、違いをわかり合えない状態にあったというのが現実で、そうしたところに障壁を感じる場面がこれまで多々ありました。「ホントカ。」も、市民からしてみると、このように立派な施設が急に本町にポンと来たと感じている人も多いんです。対外的な関係においても、整備の検討における内部的な議論においても、本当にお互いの価値観を双方理解しきれていたのかという点では、実際クリアになりきっていなかった部分もあったかと思います。私たち職員自身も、実際はさまざまな価値観がまだまだ共有しきれていなかったり、理解しきれていないなかで、たとえば図書と博物館、子育て、ものづくり等の機能を融合させようとしているんじゃないか、職員でさえできないことを市民に果たして求められるのかという不安はあります。でも一方で、市民のほうが実際には柔軟にできるもので、職員が勝手に不安になっているだけかもしれない。それは開館して動き出してみないとわかりません。しかし、「ホントカ。」が「共創」を標榜している施設である以上、価値観の違いを乗り越えたり、その違い自体を理解し合ったりするためにも、対話を続けてこうした難しさに取り組んでいかなければいけないと思います。その先に、まちへの賑わいというかたちとして戻ってくるのではないかな、とも思ってもいるんです。

開館後の未来に向けての可能性や期待

■横山：「ホントカ。」がいろんな人とお話ができ、「ホントカ。」で働いている職員とも気軽にお話ができるという施設になることで、たとえばここに来ると元気が出るとか、1日の嫌なことが忘れられるとか、そういうことを感じてもらえる希望の場所になっていってほしいと思っています。こんな施設ができるならまだ小千谷を離れなくてよかった、小千谷にいてよかった、生きていてよかった、と言われたことがあり、それが本当にうれしかったんです。そういった人たちが少なからずいらっしゃるので、このプロジェクトには意義があると思っていますし、これから、職員の人たちが頑張っているよねとか、この施設ってやっぱりあってよかったんだねとか、孫に見せてあげたいよとか、東京から来た奥さんに紹介したいよねとか、そういった前向きな言葉が、「ホントカ。」を訪れた人から自然と出るような施設にしていきたいと思っています。

■田中：この施設は中心市街地の活性化を大きな目標として、このまちの中心であり、商店街の中心に整備することになったという経緯があります。まずはそこに向けてどんなことができるか、どんなことをやっていくべきか考え続ける必要があると思っています。そのなかで、名前もユニークな「ホントカ。」という施設のとおり、ちょっとずつ変わったことにも取り組んでいく必要もあるでしょう。使う人がびっくりするような使い方を、こちらのほうからまずは見せていかなくてはならないかなと思います。そのあと「共創」というキーワードのとおり、市民の方が積極的にアイデアをもって使っていただく状態が実現できれば成功なのではないかと思っています。

小千谷市職員
田中 健 さん

「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ。」施設長。旧小千谷総合病院暫定活用時から本事業に関わり、数回の異動を経て開館年度の施設長を務める。

小千谷市職員
横山 一文 さん

2024年4月より小千谷市にぎわい交流課共創推進係の係長に着任し、現場職員のとりまとめを担う。

小千谷市職員
白井 雅明 さん

学芸員として、小千谷に関する「ひと」「もの」「こと」の収集・保存、修復・復元、調査・研究、展示・配架等を担う。

小千谷市職員
高野 暁子 さん

旧図書館時代から本事業に関わり、管理運営においては「ホントカ。」の配架計画や引っ越し対応等を担う。

小千谷市職員
吉田 奈美子 さん

2024年4月より小千谷市にぎわい交流課共創推進係に着任し、「ホントカ。」ではデジタル工作機器を備える発アンカーの運用準備を担当。

ワクワクする施設愛称「ホントカ。」の誕生

この度は「ホントカ。」を新図書館の愛称に選んでいただき、光栄の至りです。

一市民として新図書館を大変楽しみにしていましたので、愛称を一般公募すると知り、ワクワクしながら考えたのを覚えています。そのときは選ばれることなど頭になく、楽しい企画に参加できたことで満足していましたので、選定されたと知り本当に驚きました。初めは実感がなかったのですが、工事が進み、まちなかで「ホントカ。」の看板やポスターを見るにつれ、喜びと実感が湧いてきました。また、幼少から親しんできた旧図書館の閉館イベントに、命名者として呼んでいただけたことも、思い出に残っています。

愛称発案者
増川 真紀 さん

市内在住。愛称「ホントカ。」を発案し、全国から寄せられた1,745点の応募の中から選定された。

市民と名付け、市民と選ぶ

この度は、施設愛称選定委員として関わることができたことをとてもうれしく思います。新しい施設が私の思い出の一つとしてずっと残るような場所になってほしいという思いをもって愛称選定に参加しました。「ホントカ。」が小千谷市民の架け橋のような多世代交流の場となってくれることを祈っております。

選定委員
小千谷高校3年（当時）
佐藤 心奏 さん

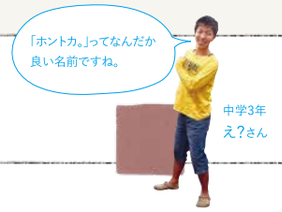
高校3年生の夏、施設の愛称選定に関わらせていただきました。愛称候補はどれも素敵なものばかりで、選び出す際は迷いに迷った記憶が残っています。それから約1年後、待ちに待ったオープンに喜びを抑えられません。この場所が小千谷の新たなシンボルになる日を楽しみにしています。

選定委員
小千谷西高校3年（当時）
和田 彩那 さん

会社員
村越真佐子さん

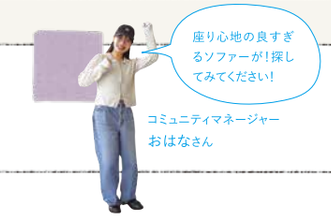
やまもとやまCAFE本
橋本実樹さん

大学教員
きっかわさん



中学3年
え?さん

Cheesecake no Kai
菅野加奈さん 丸山澪さん



コミュニティマネージャー
おはなさん

未来展望

さまざまなフィールドからの活動が動かす これからの「ホントカ。」

「ひと」「まち」「文化」の交差点

カフェを通して まちに新たな文化をつくる

“おそらく時期尚早だろう”1年前、プロポーザルへ参加した際の心の内です。当時はまだ名も無かったこの図書館等複合施設に関わってから2年が過ぎました。そして、片貝の地で開業をして3年が過ぎたところです。時期尚早?今はどうでしょう。もう、そうとも思えないのです。「ホントカ。」でコーヒーを淹れられることが決まってから、私に新しい夢ができました。小千谷市には名産品がたくさんあります。そのどれもが、私のような新参者には到底追い付くことのできない、深い歴史をもったものたちです。私の新しい夢、それは小千谷をコーヒーのまちにすること。少し出しゃばりでしょうか。でも、私ができる範囲で望む未来には、そんなまちがあるのです。

カフェ運営者
吉井 和樹 さん

小千谷市片貝町のカフェレストランNISCIRO（ニシロ）バリスタ。2023年6月の公募型プロポーザルにて「ホントカ。」のカフェ運営事業者に選定された。

PTAの活動「わたしの本をつくる」プロジェクト

子どもたちと描く 新しい施設への想い

■星野：「わたしの本をつくる」プロジェクトでは、子どもたちに「こんな図書館がいいな！」「新しい図書館でこんなことしたいな！」を妄想して描いてもらいました。「ホントカ。」が、より身近でより意義のある存在となるために、楽しく関わることで、オープンまでの2年間をワクワクした気持ちで過ごしてほしいと考え企画しました。「わたしの本」に描いた色んな妄想が実現されることを期待しています！

■森本：せっかく子どもたちに描いてもらった図書館を夢のままで終わらせたくないと思い、多くの子が描いていた「おさかないっぱいの図書館」の実現に取り組みました。錦鯉の稚魚も提供いただき図書館に水槽を並べることができ、子どもから大人まで、多くの方が目にされて喜んでいただけました。これから「ホントカ。」がみんなの居場所になっていくことを願っています。

市民（元PTA会長）
星野 哲也 さん

2022年度の市内小学校のPTA会長を務め、本事業と子どもたちとの接点づくりとして「わたしの本をつくる」プロジェクトを立ち上げ、市内の小・中学校への展開を図った。

市民（元PTA会長）
森本 恵理子 さん

2023年度の市内小学校のPTA会長を務め、「わたしの本をつくる」プロジェクトを引き継ぐかたちで、子どもたちが描いた図書館の実現に取り組んだ。

西脇順三郎を偲ぶ会

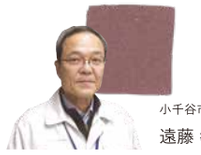
永遠の旅人 西脇順三郎の 世界への入口をつくる

■中村：この地に、西脇順三郎ライブラリーが整備されたことに大きな意義があると思います。旧図書館の記念室ではボリュームが少なかったのですが、今回はとても充実したライブラリーになったので大変ありがたいと感じています。絵画も企画展示で見せていくなど工夫をしていき、このライブラリーを通じて、日本中の方々に西脇順三郎をより知っていただきたいと思います。

■遠藤：旧図書館では記念室が3階にありましたが、今回は「ホントカ。」の1階に設けられたため、より多くの人に見てもらえる機会が増えました。また、空間も特別な設えとなり、さまざまなプロセスを経た結果、とても良い仕上がりになったと感じています。先日、高校生からも「良い場所だ」という感想をもらいました。本を借りに来た際に、フラッと気軽に立ち寄ってもらえるとうれしいです。

西脇順三郎を偲ぶ会
会長
中村 忠夫 さん

西脇順三郎を偲ぶ会　会長として小千谷出身の詩人西脇順三郎に関わる教育普及に尽力。西脇順三郎ライブラリー整備に伴う助言等を行う。



小千谷市職員
遠藤 孝司 さん

「ホントカ。」における西脇順三郎担当として、西脇順三郎を偲ぶ会との窓口や整備・運営に関わる調整等を担当。

図書館閉館イベント

図書館のこれまで、 「ホントカ。」のこれから

■吉田：旧図書館でポスターを見つけて「ホンダナ～」の活動に参加しました。新しい図書館のフロートの置き方を一緒に考えることを目標としているとのことでしたが、まずは自分のおすすめ本を紹介するところから活動は始まりました。閉館イベントでは栞づくりのワークショップや読み聞かせなどを行ったことで、図書館が子どもたちから愛されていることを感じられてうれしかったです。

■いっせい：小千谷市で音楽イベントができる場所が少ないなか、図書館閉館イベントでDJイベントを開催することになり、このまちの新たな〈キッカケ〉になれば良いなと思いました。いつもは静かにしなくてはならない図書館が音楽を楽しむとてもユニークな空間に変わり、来場者からも「楽しかった！」「面白かった！」と言っていただいてとてもうれしかったです。

ホンダナ～
吉田 あき さん

DJイベント
いっせい さん

静かなことも賑やかなこともある新しい図書館。

会社員
ミヤケさん

屋上でビアガーデン?図書館の夜も活用できたらいいな!

地域おこし協力隊
わたるさん

3階に置いてあるソファがお気に入りです!

中学3年
横山 祐樹さん

天候に左右されないのでレザーの出店には助かります!

レザーカービング
ヒロさん

高校生になるまでは受験勉強の場所です!

中学3年
やぁ～さん

ホントカ。を中心に商店街にも人が集まると嬉しい!

大学生
こっこさん